

あがつま



「兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。」

(ローマの信徒への手紙 12章1節)

♪ 讃美歌を歌おう⑳ 『神はわがやぐら』

(讃美歌 267番)

ドイツの宗教改革者マルティン・ルターによって作られた讃美歌です。ルターはカトリックとの対立が深まっていた1520年代後半に歌詞を書き、旋律も作曲しました。

この讃美歌は、後に詩人のハインリッヒ・ハイネ(1797-1856)によって「宗教改革のラ・マルセイエーズ(フランス革命の歌)」と名付けられ、日本の解説書にも「福音に敵するものは何者でも粉碎しなければやまない」という気概が脈打っている(「讃美歌略解 歌詞の部」と評されるなど、勇ましい勝利の歌として長く理解されてきました。そのため、戦意高揚のための軍歌として利用されてきた歴史があります。

第一次世界大戦の始まりの日、ベルリン大聖堂の広場で、この讃美歌の大合唱をもって出征する兵士たちは送り出されたといえます。また、ナチスドイツにおいては、4節の最後の歌詞「神の国」(原詞では単に「国」)が「第三帝国」(キリスト教用語で「来るべき理想の国家」の意味)と結びつけられ、ナチス国家への賛美として利用されていきました。

第二次世界大戦後のドイツの教会は、ナイスドイツを支えたこの讃美歌をそのままで歌い続けることはできませんでした。かといって、この歴史的な讃美歌をドイツの賛美歌集から除外することは考えられないことです。そこでドイツの讃美歌委員会は、あらためてこの讃美歌の徹底的

な研究を行いました。そして、成立史、歌詞やそのもととされた詩編四六編や、その詩編についてのルターの解説などを深く研究し直す中で、この賛美歌を「勝利の歌」ではなく「慰めの歌」としてとらえ直しました。長く宗教改革記念日の賛美歌として歌われてきましたが、あえて受難節第一主日の賛美歌として、教会暦の中でも位置づけも変更されています。

この賛美歌が軍歌として用いられていったことには、その旋律にも問題がありました。元来の旋律は非常に複雑なリズムの歌で、とても行進曲にはならないものでした。それが歌いにくいことから、しだいに単純化されて、すべて四分音符の行進曲のような旋律になってしまったのです。

ドイツでは「慰めの歌」として、このルターの名賛美歌は甦りました。日本ではいまだ、勇ましい「勝利の歌」として歌われることが多いかもしれません。自分や自国と「勝利」をへた人間の「勝利」をへた神の勝利へとすり替えてはいないかを考えさせられます。暴力によって敵を打ち砕いたのではなく、十字架の死によつてこの世に救いをもたらされた「イエス・キリストの勝利」をこそ、讃え歌いましょう。

